校長室から　令和３年３月１５日

「人は忘れてしまう」ということを忘れてしまう

「３．１１」を若い世代が語り継ぐ

東日本大震災から１０年が経過した１１日、長町中学校では、午後の時間を利用して、各学年、防災学習を実施しました。宮城農業高等学校から２名の高校１年生を招き、自分達が台本を考え、編集し、改善しながら制作したものを発表しながら、生徒達とともに考えるという形式でした。高校１年生の力が十分に発揮され、私も、二人のお話に引き込まれました。

宮城農業高等学校は、震災時に大きな被害を受けました。この震災の記憶が風化しないようにと、教職員と生徒が協力し、「自分たちには何ができるだろう？」と考え、たどりついたのが、若い世代から若い世代へ震災の記憶を継承していくという「語り部活動」でした。この日は「シロツメグサの約束」と題して、講話そして中学生と一緒に防災を考えるという企画でした。このお話しは、実話であり、お話しに登場する場所も実在の場所、そして映像も当時のものでした。

講話をしてくれた２名の生徒は、M・K さん、そして０・S さん。０・S さんは、本校の卒業生であり、約１年経過して再開した鈴さんは、すっかり自立した女子高校生として成長し、「中学生もあのように大きく成長していくのだなあ」と感じました。二人は、すでに将来設計も出来ていて、目指している職業もあるそうです。目黒さんは、名取の出身で、身近な方が犠牲になられています。それでも校長室でお話ししたときは、「この活動をずっと継続させて、風化させないようにしたい。」と、明るく笑顔で話していました。

講話は、一人の女子生徒が幼い頃一緒に遊んでいた友人が、震災で亡くなってしまったことを知り、ショックを受け「自分には何もできなかった。」と悔やみますが、別の友人に「悔いているよりも自分自身がしっかりと生きていく事が大切だよ。」と話され、悲しい事実を受け入れながら「これからはしっかりと生きていく」という事を、亡くなった友人に誓うという話です。とても心に響きました。「これは実話です。」と聞いた時、ちょっと苦しくもありました。

そして二人の生徒は、体育館の中学生に訴えます。「みんな大切な人はいますか？大切な人が明日いなくなってしまうかもしれない。明日になったら会えなくなってしまうかもしれない。」だから、ちょっとでも、ふとした瞬間にでも思い出して、思いを寄せてほしい、とお話ししたかったのかもしれません。私も彼女たちのお話しから「大切な人は誰だろう」と体育館で真剣に考えました。

いつも「あの人がいなくなってしまったら」「明日、大きな災害が起きたら」「みんなに会えなくなってしまったら」と考えるのは苦しい事でもあります。だからこそ、いつも大切にしたい言葉があるのだと感じました。「ありがとう」「ごめんなさい」この二つの言葉が自然に出るような人間でありたいと思いました。感謝の気持ちを「ありがとう」と口に出して伝える、自分が間違っていたときは、「ごめんなさい」と謝る。それは、簡単そうで難しい事でもあります。体育館で講話を聞いている皆さんの真剣な態度からも感銘を受けました。そんな時、生徒に「しっかりお話しを聞いてくれてありがとう」と伝えたいなあと感じました。

二人の高校生は力説します。**「私たちは、時が経過すれば忘れてしまうという教訓を　忘れてしまう。」**若い世代から若い世代への物事の継承、素晴らしいと思います。このような若者同士の交流を大人が補助していく、若い世代の正義感や行動を支援していく。コロナ禍で体験したとても素敵な時間でした。「３・１１」は悲しみだけではなく、希望を繋いでいく日でもあると深く感じました。